

鳥羽離宮に運ばれた各地の瓦

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 金剛心院出土の播磨系瓦による屋根葺上げ復元

はじめに 鳥羽離宮は応徳3年(1086)、堀河天皇に譲位した白河上皇によって造営が開始されました。白河院による院政の始まりです。その後、白河院の孫にあたる鳥羽院によって70年ほどの間に平安京の南郊一帯に大規模な離宮の造営が行なわれました。

鳥羽離宮には、南殿・北殿・泉殿・東殿・田中殿と呼ばれる御所があり、御所にはそれぞれ証金剛院・勝光明院・成菩提院・安楽寿院・金剛心院の御堂が付属しています。また周辺には広大な浄土庭園がともなっていて、西方浄土の世界を具現化しようとの試みでしょう。

平安時代後期には、新築の建物であっても不統一の瓦で葺かれていたことが、これまでの調査例から判明しています。鳥羽離宮では京都産の瓦もみられますが、各地から運ばれた搬入瓦が多量に出土しています。

京都へ運ばれた瓦については早くから研究され、瓦の文様や瓦の作り方などを手掛かりに出土品の製作地の同定が行なわれてきました。現在では、先学の研究や各地の瓦窯跡の調査も進展し、同定が容易となっています。播磨(兵庫県)系、讃岐(香川県)系、尾張(愛知県)系のもが多く、大和

(奈良県)系や河内・和泉(大阪府)系も少量みられます。ここでは播磨系・讃岐系・尾張系の瓦について取り上げます。

播磨系の瓦 軒平瓦の成形に包込式という手法が用いられていることが特徴で、でき上がった平瓦を瓦当部の粘土で包み込んで仕上げられています。播磨系瓦は鳥羽離宮跡からは広範囲にわたって出土していて、特に鳥羽法皇によって建立された田中殿に付属する金剛心院跡では、その軒瓦の半数以上を占めています。

注目される瓦として、金剛心院造営専用瓦と考えられる複弁六弁

れんげんじ 蓮華文軒丸瓦とからくましろ 唐草文軒平瓦の一群があります(写真1)。複弁六弁蓮華文軒丸瓦は同一文様で5型式あり、軒丸瓦総数の52%、唐草文軒平瓦は10型式あり、軒平瓦総数の66%を占めています。いずれも、文様と大きさが同一規格で作られており、統一性が認められます。この一群の瓦は兵庫県神戸市なんて 神出窯跡、明石市林崎三本松瓦窯跡、高砂市魚橋瓦窯からの出土が判明しています。船に積み込まれ、瀬戸内海から淀川をさかのぼって運ばれたのでしょう。

金剛心院釈迦堂は「播磨国所撰」(『兵範記』仁平三年十月十八日の条)とあり、播磨国が造営に関わったことが文献からもわかります。

讃岐系の瓦 播磨系ほど多くありませんが、鳥羽殿では南殿と金剛心院を中心に出土しています(写真2)。金剛心院跡では軒丸瓦総数の5%です。その特徴は瓦製作の道具にあります。瓦を叩き締める叩き板に、他地域に見られない太い縄を巻いていたのです。丸瓦の外、平瓦の凸面、軒丸瓦の瓦当裏面に、その叩き板の痕跡(縄目)が残っています。大振りの三巴文軒丸瓦、連巴文軒平瓦、唐草文軒平瓦がみられます。

あまのやま 香川県綾歌郡綾川町十坂山古窯跡群から鳥羽離宮出土と同范の軒瓦が出土しています。南殿の瓦との関係は、最初に白河上皇が造営を始めたとき讃岐守高階泰仲が、御所を造進した功で重任を受けていることが文献から説明できます。

尾張系の瓦 おとづら 灰釉瓦が特徴です(写真3)。灰釉瓦は平安時代後期から鎌倉時代に生産されました。



写真2 讃岐系の瓦



写真3 尾張系の瓦

京都の他遺跡では仁和寺と待賢門院建立の法金剛院で出土していますが、鳥羽離宮では東殿のみです。

巴文軒丸瓦・唐草文軒平瓦がみられ、灰釉を施した瓦と無釉の瓦もみられます。その瓦は愛知県名古屋市八事裏山窯・東山窯、大府市吉田窯、東海市杜山窯と同文同范関係にあります。窯は瓦専用ではなく山茶碗などの土器も同時に焼成する瓦陶兼業窯です。京都へは山茶碗などの食器類も運ばれました。

播磨・讃岐と同様に受領層との関係もありますが、尾張国内の荘

園に美福門院領や安楽寿院領が存在していました。安楽寿院一帯だけに集中するところからみて、荘園との密接な関係が窺えます。

おわりに 京都における院政期の寺院造営は、院の近臣や受領層の力によることが大きいとされています。建物や仏像を寄進することによって、成功や重任を受けたため、平安京建都以来の建築ラッシュといえるほど盛んに寺院造営が行なわれました。建物の屋根瓦も多量に必要となって、鳥羽離宮にも各地から運ばれたのです。

(前田義明)